

優秀賞

平和のかけ橋

筑西市立下館南中学校 3年
高崎 利基

「テロだって。外国人って怖いよね。」

「やっつけちゃえばいいのにね。」

2015年11月、パリでテロが起こった時、僕のクラスでは、そんな言葉がささやかれていた。外国人は本当に怖いのだろうか。

2016年9月、登校したら、教室に外国人が居た。タイから来た転校生。名前はブンチョン。彼は、1日のほとんどを日本語教室で過ごす。学活や技術教科はクラスと一緒に受けるが、いつも、つまらなそうに窓の外を眺めていた。寝ていることも多かった。彼は、日本語が分からなかったのだ。だから、休み時間に友達に話しかけられても、困った様子で、英語で何かを伝えようとしていた。

「何を考えているのか分からないよね」

「なんか、ちょっと怖いかも。」

そう言われて、孤立していくブンチョン。英語が苦手な僕は、どうすればよいのか分からなかった。

転校してきて1週間が過ぎたころ。彼は、完全に孤立していた。話しかける人もいない。窓の外を眺めるブンチョン。何を見ているわけでもなく、ただただ遠くに視線を向けている彼は、とても寂しそうに、苦しそうに見えた。『ここに居たくない。』彼の目が、そう言っている気がする。僕は、いてもたってもいられなくなって、思わず声をかけた。

「ハロー、ハロー。アイトシキ。ハウアー ユー。ええと、ええと、何だっけ。」

英語には聞こえない発音。緊張をごまかすためのおどけた表情。彼が、驚いたように目を見開いて僕を見る。そして、恥ずかしそうに笑いながら、小さな声で一言。

「Hi. (ハイ)」

それが、僕とブンチョンの始まりだった。

それから、彼は僕に話しかけてくるようになった。休み時間に、僕が日本語教室へ行くことも多かった。片言の英語と日本語。身振り手振りが会話を支える。時には、日本語教室の友達が通訳してくれた。そのうち、僕たちは、冗談を言いながら笑い合えるようになった。それを見たクラスメイトが、彼に話しかけるようになる。もう誰も『怖い。』『何を考えているのか分からない。』なんて言わなかった。

外国人が怖いわけではない。『外国人』という偏見から、『何を考えているのか分からない。』と、不安を抱くから怖いのだ。相手を恐れ防衛手段を講じれば、それに対する手段が生じる。過剰な

防衛から、いつか戦争になるかもしれない。必要なのは、過剰な防衛手段ではなく、相手を知ることだと僕は考える。偏見を持たないこと。勇気をもって、つながる努力をすること。様々な文化や考え方があることを知り、理解していくことが平和のかけ橋になると僕は信じている。

僕は、ブンチョンと友達になれた。それは、世界とつながる第一歩。たった一言でいい。

「ハロー、ハロー。」

「Hi. (ハイ)」